

岡病防 第10号
平成22年7月16日

各関係機関長 殿

岡山県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について

病虫害発生予察特殊報第1号を下記のとおり発表したのを送付します。

平成22年度病虫害発生予察特殊報第1号

平成22年7月16日
岡 山 県

1. 病虫害名 ミカントゲコナジラミ (チャ系統) *Aleurocanthus spiniferus* (Quaintance)

2. 発生作物名 チャ

3. 発生確認場所 岡山県北部

4. 発生確認の経過

平成22年7月、岡山県北部の茶園で下葉にすす状の障害（葉にすすがついたように黒く汚れる。濃色すす病に類似）が発生しているとの情報を得た。同月、現地調査を実施したところ、本障害が発生している葉にコナジラミ類の幼虫の発生を確認した。採集したコナジラミ類の幼虫を、京都府立大学応用昆虫学研究室を通じて久留米大学上宮健吉博士に送付し、診断を依頼したところ、チャ寄生性のミカントゲコナジラミと同定された。チャ寄生性のミカントゲコナジラミは平成16年に京都府で初めて確認され、その後、滋賀県、奈良県、三重県、島根県、福岡県、埼玉県、岐阜県及び大分県で発生が確認されている。

5. 形 態

成虫の体長は雌で約1.3mm、雄はやや小型で体は橙黄色であるが白粉で覆われる。前翅は紫褐色で不整形の白斑がある（写真1）。卵は長さ約0.2mmで勾玉状、短い卵柄がある。孵化幼虫は淡黄色で、定着すると光沢のある黒色になり、4齢幼虫（約1mm）を経て成虫となる。幼虫には周囲と背面に多数の刺毛があり、齢が進むと周囲の白色ロウ物質が明瞭になる（写真2、3）。

6. 生態

(1) これまでの発生県からの情報によると、本種は年3回程度発生し、成虫の発生時期は越冬世代が5月中旬、第1世代が7月中旬、第2世代が8月下旬から9月上旬頃とされている。なお、その年の気候や地域により第3世代の成虫が10月中下旬に発生することもある。成虫の寿命は約4日間と短い。新葉の葉裏に産卵することが多く、孵化幼虫は分散せずに群生する（写真4）。幼虫の固着した苗木による移動の他、成虫が風に乗って分布を拡大する。

- (2) ミカントゲコナジラミの主要な寄主植物はカンキツ類とされるが、本事例のようにチャに寄生するものはチャ系統として区別される。ミカントゲコナジラミ（チャ系統）の寄主植物はチャの他、サカキ、ヒサカキ、ナツツバキ、ヤブツバキ、サザンカなどである。

7. 被害

- (1) 成虫及び幼虫によって葉が吸汁加害され、幼虫が分泌した排泄物による葉のすす状の障害が併発する（写真5）。一番茶摘採期と成虫の発生時期が重なると、収穫作業者が虫を吸い込み、作業に支障を来す。

8. 防除対策及び参考事項

- (1) 本種の卵及び若齢幼虫は微小で、葉裏に産卵・寄生するため、成虫やすず状の障害が発生するまで気づかず、発見が遅れやすい。定期的に茶園を観察し早期発見に努める。
- (2) 発生が多い場合は中切りを行い、卵・幼虫の寄生葉を除去する。除去した寄生葉は発生源になるため放置せず、土中に埋没する等、必ず適切な処分を行う。
- (3) 本種は卵から幼虫までの期間は葉裏で固着生活するので、整枝の時期や深さを工夫して効果的に寄生葉を除去し、次世代の密度抑制を図る。
- (4) 放任茶園は本種の発生源になる可能性が高いので、適切な管理を行う必要がある。
- (5) 薬剤の防除適期は、若齢幼虫の発生時期である。若齢幼虫は、成虫の発生が終息する時期から増加する。3齢幼虫以降になると防除効果が低くなるため、成虫の発生状況をよく観察して、若齢幼虫の発生時期を把握し、適期防除を心がける。チャの登録薬剤は下表のとおりである。薬剤は、葉裏までかかるように散布し、薬剤感受性の低下を回避するため、同一薬剤の連用は避ける。
- (6) 冬期の薬剤防除について、1月から3月にかけてマシン油乳剤（トモノールS、ラビサンスプレー）を1か月間隔で2回散布すると、3齢以降の幼虫に対しても効果がある。

表 チャのミカントゲコナジラミに登録のある薬剤（平成22年7月14日現在）

薬剤名	使用時期	使用回数	希釈倍数	使用量
アブロード水和剤 a)	摘採14日前まで	2回以内	1000倍	-
アブロードエースフロアブル a)	摘採14日前まで	1回	1000倍	200～400L/10a
ダントツ水溶剤	摘採7日前まで	1回	2000倍	200～400L/10a
ハチハチ乳剤 b)	摘採14日前まで	1回	1000倍	200～400L/10a
ハチハチフロアブル b)	摘採14日前まで	1回	1000倍	200～400L/10a
ダニゲッターフロアブル	摘採7日前まで	1回	2000倍	200～400L/10a
ランネート45DF	摘採21日前まで	2回以内	1000倍	-
ラビサンスプレー	5～9月 c)	-	100～150倍	-
	10～3月	-	75倍	-
トモノールS	10～3月	-	50倍	-

a) b) 同じ文字の薬剤は同一成分を含むため使用回数制限に注意する。

c) 摘採直後の幼虫発生期に使用し、摘採前4週間は使用しない。また、夏期高温時の散布は薬害を生じやすいので日中を避け、朝夕の涼しいときに所定範囲の低濃度で行うこと。

この情報は、農林水産総合センターホームページでも公開しています。

アドレスは、http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec_sec1=239



写真1 雌成虫 (バーは1mm)



写真2 幼虫 (バーは1mm)



写真3 幼虫の拡大 (バーは0.5mm)



写真4 チャ葉裏で群生している幼虫



写真5 本虫の排泄物により生じたすす状の障害

(写真1、3 : 久留米大学 上宮健吉博士提供)